



## 主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

「ことば」こそ、人間にいちばん近くあるもの

あらためて、主のご降誕おめでとうございます。ご降誕日中のミサでヨハネ福音書の冒頭部分が読まれます。この部分、今年は夜半のミサとうまくつながりをもって説教ができそうです。

夜半のミサの説教で、「いちばん近くに来られた救い主」について話しました。この日中のミサでは、「言（ことば）は肉となって、わたしたちの間に宿られた」（1・14）と証言しています。この宣言は、何がいちばん近くにあるものかを考えさせます。人間にとって、いちばん近くにある道具は何でしょうか。それは「ことば」ではないでしょうか。

私たちには目や口、手足といった見える部分がありますが、それ以上に近くにあるものがあるとしたら、それはことばではないでしょうか。この世に生を受けて、私たちは、最初は手足を動かす力もありません。ですが生まれたその時から「声」を発しています。頭も座っていない、寝返りも打てない時から、自分の存在を知らせるために「声」を発しているのです。これは、人間にとって最も近い道具が「ことば」だと感じさせる出来事ではないでしょうか。

また物心つく私たちはことばで自分の意思を伝えます。ことばで思いを表現します。ことばを空虚なものにしないために、手足を使ってそれを証明しようとしています。思いを伝えるため、多くの場面でことばが先にあるのではないのでしょうか。ことばが先にあるのは、すなわちことばが私たちのいちばん近くにあるからだと思うのです。

イエスは「言（ことば）」です。「言（ことば）が肉となった。」ことばが肉体と一つに結ばれました。いつか、発せられたことばは肉を離れますが、これから発せられようとしていることばはその人の最も近くにいます。神は人間の最も近くにおられるために、「言（ことば）」としておいでになったのです。

ことばはいつか外に向かいます。ことばは相手を必要とするからです。私たちを離れて、誰かの元に届いていきます。ここで私たちは、外に向かおうとしていることばに十分注意を払うべきです。私たちと同じ肉体に、ことばが宿りました。ことばが肉となった姿をこのご降誕で見たのですから、私たちはこれから語ることばに十分注意を払うのです。

私の語ることばに、御子イエスがおられるのでしょうか。私たちが他の人に向けて放つことばに、喜びの知らせが込められているのでしょうか。私たちのことばにとげがないのでしょうか。誰かを悪く言って自分を守ろうとする企みがないのでしょうか。

神の言（ことば）が肉となった今、そのようなつまらない策を練っている場合ではありません。まっすぐに、口から溢れることばが救い主の喜びを告げることばとなるように、幼子の前に跪き、語るべきことばを受け取ることにしましょう。